

心はどこにもないのに  
どこにもあるのか？心はどこにもないのに  
どこにもある

今

居場所を探している心とは  
なんだろう？ 考えたり、  
見たり、感じたりするもの  
だ。心は人それぞれがもつだから  
身体はどこかに宿っているに違いない。  
昔は、心臓にあると思われていたけれど、  
今では脳にあると言われている。

でも、脳にあると言っても、ほくら  
の脳を解剖したって、そこに見つかる  
のはニューロンと呼ばれる神経組織  
や、血管や血液だけだろう。パッパを  
聴いているとき、チェンバロの「音」  
は脳の中でまったく鳴っていない。青  
い海を見ているときも、脳は少しも  
「青く」染まらない。

心の一番大事な特徴は、心とはほくら  
のすべての経験のただ一人の主人公で  
あるということだ。ほくらの心は、ほくら  
の経験する内容だけからできている。  
他人にはわからない、ほくらだけがもつ  
経験を「一人称的経験」と言ったりす  
る。「三人称的」に接近可能な、他人  
と共有できる世界の知識は、この「一  
人称的経験」を通してしか得られない。  
ほくらの心だけが感ずる、あの空の  
〈輝き方〉は一人称的経験だ。それに  
対して、「あの空が輝いていること」

は、他人とも共有できる、「三人称的」  
に接近可能な世界の状態である。

さて、心はどこにもないというのは、  
ほくらの一人称的経験が、三人称的に確  
認可能な世界のどこにも、それどころ  
か、なんとほくらの脳の中にさえもな  
い、ということである。ためしに今度  
は、パッパを聴いているきみの脳の中  
を覗いてみよう。このとき、きみです  
ら自分の脳の中に見つけるのは、きみ  
が一人称的に経験する〈音の感覚〉そ  
のものではなく、三人称的に観察でき  
るきみの脳の神経活動にすぎない。さ  
て、客観的世界というのは三人称的に  
共有された世界のことだから、一人称  
的な心はその世界のどこにも居場所が  
ないことになる。いつかきみが感じた  
未来へのかすかな不安が、三人称的世  
界のどこにも存在していないように。

でも、ほくらの心の一人称的な経験内  
容って、なんだろう？ それは他人が  
わからなくても、自分にはよくわか  
る。いま感じている寒さだし、空に見  
えている飛行船だし、さっきのきみの  
脳の中身だ。あれ、なあんだ。それは  
結局、三人称的世界そのものじゃない  
か。一人称的な心は三人称的な世界の

どこにも存在しないのに、ほくらは、  
心の経験内容が三人称的世界の中身に  
なっている。そして、心とはそれが経  
験する内容に他ならないなら、心は世  
界のいたるところに存在していること  
になるだろう。なぜって、ほくらの経  
験のすべてが世界なのだし、ほくらが経験  
できない世界は〈無〉だからだ。

それじゃ、世界は心がつくったの  
か？ いや、それも違う。きみの脳の  
側頭葉の辺りに障害が起きると、忘れ  
ていた歌が突然聞こえてくるなど、き  
みの一人称的経験はいやでも変化する。  
だから、一人称的経験はある意味で三  
人称的世界からつくられる。このこん  
がらがった事態をどう理解したらいい  
のだろう。残念だけど、簡単な答えは  
ない。ほくらはようやく、心や脳や経  
験や世界についての、存在論という哲  
学の入りに口に入ったところなのだ。

## 柴田 正良先生

1953年大分県生まれ。東京  
都清瀬市立芝山小学校、  
同市立第二中学校、東京  
都立東久留米高校、名古  
屋大学大学院博士課程を  
満期退学。現在、金沢大  
学人文学部教授。著書に  
『ロボットの心』（講談社  
現代新書）がある。